人のかへりとに
九五君を社末の松とは思しか均しなみには誰かこゆべき
人に
〇六あふ事はとまれ斯まれ歎かしを怨絶せぬ中と也せば
月あかき夜人に
一六心見に雨も降らなむ門過て空行月のかけやとまると
れいのかへりとに
二六釉の浦に唯わかやくと汐垂て舟渡したる蜑と社なれ
七月七日
三六詠むらむ空をだにみず七夕に餘る計の我身と思へば
人に
四六寢覺ねばきかぬなる覽荻風に吹らむ物を秋の夜毎に
五六徒然と秋は日頃のふるまゝに思ひ時雨ぬ怪かりしも
いでゝきこえさす
六六山を出てくらき道にを尋ねこし今一度の逢事により
風ふき物あはれなる夕ぐれに
七六秋風は氣色吹だに悲しきにかき曇る日は云方ぞなき
うと〳〵しう打ちくもる物から雨のけしきばか
りふるはせむかたなくて
八六秋の内に朽はてぬべし理の時雨に袖を誰にからまし
九六消ぬべき露の我身は物のみぞあゆく草ばに悲かりける
露まどろまでなげきあかすに鴈の聲をきゝて
〇七睡まで哀幾日に成りぬらむ只雁音を聞くわさにして
九月ばかり有明に
一七我ならぬ人もさぞみむ長月の有明の月にしかし哀は
二七よそにても同じ心に有明の月を見るやと誰にとはまし
人こひしきに
三七惜まれぬ涙にかけて止らなむ心もゆかぬ秋はゆく共
四七君を置て疾ち行くらむ我だにも憂世中に强て社ふれ
人のかへりとに
五七朝のまに今はひぬらん夢計ぬると見えつる手枕の袖
おなじ人の返とに
六七道芝の露とおきぬる人により我手枕のそでも乾かず
来云右從一三迄者。京極黄門定家卿以自筆本令書寫。從四五迄者。
民卿部局以異筆寫。即時再三校合畢

續國歌大觀歌集 終

續國歌大觀改版歌集部
定價金二十圓也

大正十四年十一月十二日改版印刷
大正十四年十一月十五日發行
大正十四年十一月二十日再版發行

編者　松下大三郎　東京市小石川區大塚町二十番地
發行者　濱中辰吉　東京市小石川區小日向臺町三丁目四十三番地
印刷者　大鳥齋鈴　東京市小石川區小日向臺町三丁目四十三番地
印刷所　八洲舍印刷所

不許複製

發行所　東京市小石川區大原町二十番地
紀元社書店
振替東京五九二二二

911.108
Ma 88
(3)

終